

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

地域日本語教育における「日本語教育実践」を捉え直す

—多様な背景を持った支援者が関わることのできる

日本語教育の構築を目指して—

上原龍彦

2013年9月

「地域日本語教育における「日本語教育実践」を捉え直す―多様な背景を持った支援者が関わることのできる日本語教育の構築を目指して―」（以下、本論文）は全 6 章から成る。本論文は、地域の日本語教室で活動するボランティアの語りから、地域日本語教育における「日本語教育実践」を捉え直し、多様な背景を持った支援者が日本語教育に関わるためには、その支援者個人にどのような視点が必要なのかを明らかにすることを目的とするものである。

1. 研究背景と目的

第 1 章では本研究の背景と問題の所在、研究課題の設定および本論文の構成を記述した。筆者は東京都内にある地域の日本語教室 X（以下、教室 X）で活動している。教室 X では教科書を用いたレッスンが行われている。筆者は教室 X で活動するボランティアの活動を当初、「教科書の日本語を教える」ものとして批判的に捉えていた。なぜなら、教科書を教えることで、ボランティアと学習者の間に「教える―教えられる」という権力関係（森本 2001）を構築していると考えていたからである。しかし、ボランティアと関わる中で彼らが持つ活動についての考えに触れたことをきっかけに、彼らの活動を「教科書の日本語を教える」ものと一括りにすることができないこと、そして筆者のように外側から見える形のみで活動を評価するまなざしがボランティアの活動を制限してしまう危険性があるということを実感した。筆者と同じく、他の地域の日本語教室でも「あの人は日本語が上手に教えられない」と目に見える「形」で評価するボランティア、そしてそれをきっかけに日本語教室を辞めてしまうボランティアが存在する（御館ほか 2010）。

以上のような、目に見える「形」のみで活動を評価する背景には「日本語教育実践はある教育方法が先にあり、それを実行することである」という日本語教育実践観がある。ボランティア同士の「教科書をうまく教えることができないからボランティア失格だ」という発言や「ボランティアは教科書を教えるべきでなく、対話活動を行うべきである」といった日本語教育の専門家によってなされる地域日本語教育の提言の背景には、活動に関わる人の意思に先立って「教科書を教える」「対話活動」といった教育方法が前提として存在している。そして「その教育方法が実施されているか否か」という表面的な基準から他者の活動を評価している。このような日本語教育実践観の下では、多様な背景を持った支援者が地域の日本語教室で活動することができなくなり、日本語教育の専有化が起こる可能性がある。なぜなら、「求められるべき」教育方法を習得していない者は日本語教育に関わ

ることができないからである。筆者の教室 X の経験に対する反省そして地域日本語教育を取り巻く状況に対する問題意識から、「ボランティアと専門家」「日本語教育の資格を持つ者とそうでない者」などといった支援者間の立場を越え、多様な背景を持った支援者がそれぞれの良さを発揮しながら共に日本語教室で活動する、つまり日本語教育に関わることができるために、筆者を含めた支援者一人一人にどのような視点が必要なのだろうか、という本研究の問いが生まれた。

多様な背景を持った支援者が日本語教育に関わる際の視点を導き出すためには、「日本語教育実践はある教育方法が先にあり、それを実行することである」という日本語教育実践観を捉え直す必要がある。その際、ボランティアの語りに接近することが有効である。地域日本語教育研究において、ボランティアは常に「語られる対象」(太田 2010: 5)であり、専門家が提示した教育方法を実行する「受動的な受け手」(太田 2010: 4)として捉えられてきた。そのため彼らの声は聴かれることがなかったのである。しかし、ボランティアは「主体的に実践を行う存在」(太田 2010: 6)であり、「日本語教育実践」が「実践主体」を取り巻く状況との相互作用の中から形作られる(太田 2010)。したがって、ボランティア自身が持つ活動に対する意味づけやその形成過程に注目することが「日本語教育実践」を捉え直す際に有効である。その上で、ボランティアの声から彼らの「日本語教育実践」の内実に迫り、それを支えたものを考察することで、「日本語教育実践」を捉え直し、多様な背景を持った支援者が日本語教育に関わる際に必要な視点を導き出せると考えた。

以上を踏まえ、以下のように本論文の研究課題を設定した。

【研究課題】 地域の日本語教室で活動するボランティアの語りの分析を通して、地域日本語教育における「日本語教育実践」を捉え直し、多様な背景を持った支援者が日本語教育に関わる際に必要な視点とは何かを考察する。そのために2つのリサーチクエスション(以下、RQ)を設定する。

RQ1: ボランティアの語りから読み取れる「日本語教育実践」とは何か。

RQ2: ボランティアの「日本語教育実践」を支えたものとは何か。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

第2章では、地域日本語教育の動向を整理し地域日本語教育が抱える問題を指摘した。その上で本研究の立場と視座、及び本研究の位置づけを行った。

地域日本語教育において、ボランティアが日本語教育に関わるからこそ生まれる課題が大きく分けて 3 つ指摘されている。①ボランティアが日本語教育に関わることの限界についての課題、②ボランティアと学習者との間に構築される「教える—教えられる」という関係性に関する課題、③外国人の日本語学習保障にかかわる課題である。これらの課題を解決するために、「日本語教育の専門家が一定程度の日本語能力を習得させることを目的とする日本語教育を公的保障の下で行い、ボランティアと共に自己実現や社会変革を目的とした日本語教育を行う」という主張がなされるようになった(新庄 2007)。しかしこの主張は「準備的教育」「個体主義的な能力観」に基づいた日本語教育観(池上 2011)、さらに、「ある教育方法を実行することが日本語教育実践である」という日本語教育実践観に立脚していることを指摘した。そしてこのような日本語教育観及び日本語教育実践観は、日本語教育の専有化を生み、ひいては学習者の学びを分断してしまうという問題を孕むことを述べた。

この問題を乗り越えるためには、地域の日本語教室で活動する支援者一人一人の「日本語教育実践」の内実及びそれを支えるものを明らかにする必要があること指摘した。なぜなら、実践に関わる一人一人の声が「準備的教育」「個体主義的な能力観」に基づいた日本語教育観を捉え直し、新たな日本語教育を創造する可能性を持っているからである。さらに「ある決まった教育方法が最初にあり、それを実行すること」という日本語教育実践観を捉え直し、専門家やボランティアといった立場を越えた支援者一人一人が日本語教育に関わる際に持つべき視点を提示する必要があることを述べた。その上で、本研究は日本語教育に関わる一人一人の語りによりよい日本語教育を構築する際の一助になるという立場に立つ、という本研究の立場を提示した。また、「ボランティア」を「実践主体」(太田 2010:6)と捉える視座、ボランティアがもつ「活動観」が「日本語教育実践」を方向付け(細川 2005)、彼らを取り巻く状況との相互作用に着目して「日本語教育実践」を捉える視座の 2 点を提示した。なお、「活動観」を「活動する上で心がけていることや工夫していること、目標にしているレッスンなど、日本語ボランティアの活動を行う上で支えとなる考え方そして自身の活動を方向付ける考え方の総体」と定義した。そして本論文を①ボランティアによる「日本語教育実践」の実態を把握する研究、②ボランティアを含めた多様な支援者が対等な立場で日本語教育に関わることができる可能性を提示する研究として日本語教育に位置づけた。

3. 研究方法

第3章では、筆者と研究協力者が活動する教室 X の概略、研究協力者である岩瀬さん・粕谷さん・臼井さん（すべて仮名）の背景、調査方法、研究倫理及び分析方法を述べた。本論文では「活動観とその形成に影響した経験」という目に見えないものに注目するため、インタビュー調査という方法を採用した。そして各研究協力者に対し3回ずつインタビューを行った。これらのインタビューを分析の対象とし、佐藤（2008）の分析方法を参考に「調査協力者が持っている活動観とは何か、その形成に影響した経験は何か」を観点にインタビューを分析した。

4. 分析結果

第4章では研究協力者である岩瀬さん・粕谷さん・臼井さんの語りの分析結果を示した。

岩瀬さんは当初、学習者の様子を見ずに教案通りにレッスンを進めていた。しかし、「学習者の背景に対する認識」「他のボランティアとの目的の共有」「ことばのサポートに対する重要性の認識」を通して学習者の日本語の理解を深めるという活動観を形成した。そして、ディスカッションのクラスで「教室参加者の間に学びが生まれた実感」と「学習者が自分のことばで表現できたという実感」が得られ、さらに学習者の持つ「考えていることを日本語で表現する力の気づき」を通して日本語による表現を支えるという活動観を形成した。その2つの活動観と「留学先でのサービス精神あふれる授業の経験」に対する意味づけが重なり合い、今いる教室参加者だからこそこできる「生きたレッスン」をするという活動観を形成した。

粕谷さんは教室 A で活動している頃は日本語を教えることがどのようなことかわからず、活動観を形成することができなかった。しかし教室 B で「他のボランティアの関わり方からの学び」と「新入社員研修におけるファシリテーターの経験」を重ね合わせることで学習者に安心感と達成感を生み出すという活動観を形成した。そして教室参加者の様々なやり取りを促すなどの工夫を行うようになった。その後、教室 X に参加し充実した活動を行っていた一方で、学習者の自立的な日本語学習を支援するという「教室 X の方針の齟齬」、教室 A において学習者のニーズにしか応えられなかった「自身の役割に対する不十分さの認識」、そして相手の求めているものを察知しそれを提供する「日本語教育以外の教育経験・指導経験」から学習者が求めているものをメタ的に捉えるという活動観を形成した。

臼井さんも当初、日本語を教えることとは何を意味しているのか分からなかった。その

ため「レッスン中の学習者の反応」や「他のボランティアの関わり方」に注目したり、「他のボランティアと目的を共有する話し合い」を行ったりした。以上の実際の活動の中から得た経験と自身の「外国語学習経験」及び「新入社員研修の経験」を重ね合わせる中で学習者の中に日本語に対する理解を生み出すという活動観を形成した。そして「学習者の間に関係性が構築されたという実感」を得たレッスンの意味を「筆者とのインタビュー」で捉え直していくこと通じて、学習者の中に安心感を生み出すという活動観に気付き、学習者に日本語の理解と共に安心感を生み出すという活動観を形成した。

5. 考察

第5章では、第4章の分析結果を踏まえ、本論文の研究課題に答えた。

最初に「RQ1 ボランティアの語りから読み取れる『日本語教育実践』とは何か」という問いに対する答えを述べた。研究協力者の活動観は①研究協力者自身の経験及び研究協力者を取り巻く状況に対する意味づけを行いながら活動観を形成する過程と②活動観を他者と共有し捉え直していく過程が重なりあう中で形成されていることが分かった。ここで「活動観」を「目指す日本語教育」と捉えると、活動観の形成過程は「目指す日本語教育」を問いつける過程であり、その過程こそが「日本語教育実践」であると述べた。

続いて「RQ2：ボランティアの『日本語教育実践』を支えたものとは何か」という問いに対する答えを述べた。研究協力者の活動観形成に影響したものとして「外国語学習経験・日本語教育以外の教育経験」、「学習者との関わり」そして「ボランティアとの関わり」という3つの要素があることが明らかになった。そして、これらの要素が具体的にどのように研究協力者の「日本語教育実践」に影響しているのかを考察した。「外国語学習経験・日本語教育以外の教育経験」は、周囲の状況や自身の活動に対する意味づけに影響し、「目指す日本語教育」を方向付けていた。つまり自身の「外国語学習経験・日本語教育以外の教育経験」と自身を取り巻く周囲の状況及び自身の活動との関係を考える行為が研究協力者の「日本語教育実践」を支えていたことが分かった。続いて「学習者との関わり」の「日本語教育実践」への影響について述べた。研究協力者の語りから、学習者との関わりの意味を考えることを通じて自身の「目指す日本語教育」を問い直していく行為が見られ、その行為が研究協力者の「日本語教育実践」を支えていたことが分かった。最後に「ボランティアとの関わり」の「日本語教育実践」への影響について述べた。研究協力者は自身の「目指す日本語教育」と、他のボランティアの「目指す日本語教育」との間の重なりが実

感できたときに、自身の「目指す日本語教育」に意味を感じていた。つまり、他のボランティアと「目指す日本語教育」の重なりを実感できる環境が研究協力者の「日本語教育実践」を支えていたことが明らかになった。

以上を踏まえると、RQに対する答えは次のようになる。

RQ1：ボランティアの語りから読み取れる「日本語教育実践」とは何か。

自身の経験及び周囲の状況を意味づけながら「目指す日本語教育」について考える過程と「目指す日本語教育」を他者と共有し捉え直していく過程を積み重ねていくこと、つまり「目指す日本語教育」を問い続けていく過程そのものである。

RQ2：ボランティアの「日本語教育実践」を支えたものとは何か。

- ①外国語学習経験・日本語教育以外の教育経験と自身を取り巻く状況及び自身の活動との関係を考える行為
- ②学習者による反応の意味を考えることを通して自身の「目指す日本語教育」を問い直していく行為
- ③他のボランティアと「目指す日本語教育」の重なりを実感できる環境

以上の考察を踏まえ、5. 3において多様な背景を持った支援者が日本語教育に関わる際に必要な視点を3点提示した。

- ①支援者一人一人に「目指す日本語教育」があるという点で対等であることを支援者それぞれが認識する視点
- ②支援者自身の経験から形作られる「目指す日本語教育」を意識化する視点
- ③②の「目指す日本語教育」及びその背景を他の教室参加者と共有し合い、捉え直していく視点

6. 結論

第6章では、本論文をまとめ、本論文が日本語教育に示唆するもの、及び本論文の課題を述べた。

まず、地域日本語教育に対する示唆を3つ述べた。1つ目は支援者一人一人の姿勢に対する示唆である。様々な立場を越えて、支援者一人一人が自身の「日本語教育実践」につい

で自分のことばで語り、そしてその「日本語教育実践」に支援者一人一人が耳を傾け、学ぶ必要がある。2つ目は準備教育的な日本語教育観、個体主義的な日本語教育観に基づいた日本語教育を乗り越えていく可能性に対する示唆である。そのような日本語教育を乗り越えるためには、地域の日本語教室で活動する支援者一人一人が「日本語教育実践」を語り、それらを積み上げながら「日本語教育とは何をする事なのか」という問いを追求していく必要がある。3つ目はボランティア養成に対する示唆である。ボランティアの「教授法を知りたい」という要望に応じてボランティア養成講座が各地で開催されているが、ただ単に教授法を与えるのではなく、ボランティアが持つ「目指す日本語教育」との関連を踏まえ教授法を位置づけていくべきである。また本研究で得られた視点は地域日本語教育のみならず、日本語教育全体においても必要となる視点であり、様々な違いを越えた日本語教育を構築するために必要な視点である。その視点を提示できた点で本研究は意義がある。

本研究の課題は次の通りである。①ボランティアの実際の行動も踏まえ「日本語教育実践」のプロセスを精緻化していくこと。②個々の「日本語教育実践」が重なり合い一つの「日本語教育実践」になっていくプロセスを解明すること。③「日本語教育実践」における学習者の関わりの詳細を明らかにすること。

引用文献

- 池上摩希子 (2011) 「地域日本語教育の在り方から考える日本語能力」『早稲田大学日本語教育学』9 pp.85-91
- 太田裕子 (2010) 『日本語教師の「意味世界」—オーストラリアの子どもに教える教師たちのライフストーリー』ココ出版
- 御館久里恵ほか著 (2010) 『外国人と対話しよう！日本語ボランティア手帖』凡人社
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社
- 新庄あいみ (2007) 「地域日本語教育における二つの視点」『大阪大学言語文化学』16 pp.127-139
- 細川英雄 (2005) 「実践研究とは何か—『私はどのような教室をめざすのか』という問い」『日本語教育』126 pp. 4-14